

人々から学ぶ (フィールドワーク心得帖 第25回)

著者	寺本 実
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	200
ページ	58-59
発行年	2012-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003983

フィールドワーク 心得帖

第25回 寺本 実

人々から学ぶ

●個人としての考え

ある研究会の場で「研究者は自身の能力に応じて手法を選ぶ」と一人の参加者が発言した。筆者は筆者に対する発言だと感じ、手厳しくも率直なメッセージとして心に残った。

筆者は人の本質が今も昔もそれほど変わっていないと考えている。同様に、手法の新旧に関わらず、考察の対象者、事象の本質の一端でも捉えることができるのであれば、手法として意義があると考えている。

本拙稿では、フィールドワークについて筆者が思うところとその経験の一端について、認めることにしたい。

●「交流」は双方向

フィールドワークは、生の人間による生の現実・世界に対する直接的な理解の試みである。そこには常に「異文化」間、人と人との間の「交流」という要素が含まれるから、調査者も一人の人間としての自身をさらけ出さざるをえない局面がある。そうした意味で、その土地のもの

を食べること、その土地の習慣に従って排泄することも、広い

意味におけるフィールドワークだと考える。高度な教養を誇る研究者であろうと、筆者のような未熟者であろうと、残酷なまでにその点については変わらな

いのではないか。たとえばフィールドで仕事の中のトイレ。ある村で我慢できず慌てて初めて大便をした際、処し方が分からず、

筆者は側にあった新聞紙で拭いた後、自身が生み出したモノの上に置いて出てきてしまった。後からどうすべきだったのか分

かったのだが、今も恥ずかしさ、申し訳なきが心に残る。

また、調査する側は、調査対象者を「見る」というだけでなく、調査対象者によって「見られる」側でもある。国籍、性別、

職業、身体的特徴、性格、能力、家族構成…。調査者も自身と自身の持つ条件を調査対象者によって「測られる」ことになる。

結果的にフィールドワークは、調査対象者・調査事項に対して調査者が理解を深める機会というだけでなく、調査対象者と調

査者相互の「交流」の機会だといえる。またそれは、調査者にとつて、自身と自身が持つ諸条件、それらが当該地において持つ価値と直接向き合う機会となる。

●調査のタイプ

筆者のフィールドは、ベトナムである。筆者の限られた経験によれば、ベトナムに関する現地調査には、大きく分けて以下の三つのタイプがある。(1)各関係機関の専門家に対してインタビューをして回るタイプの調査、(2)一定程度まとまった数の対象・地域について、調査票など各種の手法に基づいてデータを集めて理解に迫ろうとするタイプの調査、(3)前記二つを組み合わせた調査、である。これらのいずれもフィールドでのワークである。しかし、ここでは、(2)のタイプの調査における、筆者の経験に基づいて、記すことにしたい。

●フィールドにて

筆者が初めてベトナムを訪れたのは一九九五年。初めて先の(2)のタイプのフィールドワークを行うことができたのは、二〇〇五年のことであり、一〇年余りの月日を要した。筆者は入所

当初、動向分析部という部署に所属しており、ベトナムの現状について政治・経済・外交という幅広い観点から理解し、説明することを求められた。変化の激しい近年のベトナムについてこうした作業を行うだけでも実際には容易でない。この場合、ニーズに速やかに応えようとすれば、先の(1)のタイプの調査が主流となる。

そんな筆者が初めて(2)のタイプの調査を行うことができたのは、ベトナム北部の紅河デルタに位置するある省（中央の直接下の行政級）においてであった。ベトナムの研究機関と現地行政機関（各級人民委員会）のご理解とご協力を得て、同省の中心部からほど近くにある行政村で障害者の生計調査を行った（社会主義国であるベトナムでは、基本的に同国の組織、機関の協力と理解を得ることができなければ、一定程度まとまった調査を実施することは困難である。インフォーマルなコネクションを用いる、あるいは偶然お会いした方に立ち話をしながら話さうかがうことも考えられる。しかし、前者はそうした条件をもつ人に限られ、後者はインタビューの数、時間が限られる公

専門は、ベトナム地域研究。主な著作に『現代ベトナムの国家と社会—人々と国の関係性が生み出す〈ドイモイ〉のダイナミズム』(編著、明石書店、2011年)、『ベトナムの障害者の生計—外部環境とのかかわりについての事例調査を通じた考察—』(森壯也編『途上国障害者の貧困削減—かれらはどう生計を営んでいるのか—』岩波書店、2010年)、『ベトナムの枯葉剤被災者扶助制度と被災者の生活』(『アジア経済』第53巻第1号、2012年1月)など。

算が強い)。以降、類似の調査を重ねている。

使用してきた手法は、調査票に基づく各家庭直接訪問調査である。同手法を選択したおもな理由は、(1)共通の質問事項をベースにして、一定数の家庭の状況について調査できること。それにより相互比較が可能となること、(2)比較的安定したインタビュー結果が資料として確実に残せること、(3)直接ご自宅を訪問して話をうかがうことにより、調査対象者の生活環境と状況を理解しやすくなること、である。

質問票の作成に際しては、初めから現地語で作成し、調査に協力いただくベトナム機関に理解と確認を得るプロセスを踏む。現地調査を行う際、現地の責任者に調査票の提出をよく求められる。そのため、筆者はなるべく慎重に調査票の作成作業を進めるようにしている。

調査対象者の選定については、緩やかな条件を提案するに留めている。ここでは数ある理由のなかから、人民委員会の担当者は現地事情に精通していること、統計学的な調査というよりも質的な調査を志向していることを理由として記しておきた

い。

訪問家庭数については、以下の条件に基づいて基本的に定めている。(1)滞在可能期間、(2)調査地への所要移動時間、(3)現地を管理する各級人民委員会との調整に要する時間、(4)一日の訪問可能軒数(調査票の項目数、地理的条件、天候により影響を受ける)、である。

ここで(4)については、もし調査地で調査の目的、社会状況、地理的条件を理解する協力者が得られれば、調査家庭数の増量は可能である。初めてのフィールドワークの際、筆者も調査地方在住の方に作業をお願いしたことがあった。しかし、分析を行う際にはその方が書き込んだ調査票の使用を避けることにした。この判断の背景には次のようなことがあった。その方から受け取った調査票の束を見直した際、ある質問事項欄がすべて空欄になっていた。そのため、再調査をお願いした。翌朝すぐにその方は空欄を埋めた調査票を持ってきて下さった。しかし顔が赤く、どうみてもお酒を飲んでる。万が一、机上で作文された結果であつたら…と筆者はどきっとした。筆者が間違っているかもしれない。一度問

を発してしまえば、現実はどうあれ相手のメンツはつぶれてしまう。その場の判断として、筆者は調査票を「ありがとう」と受け取った。しかし分析の際には先の判断に従った。以降、筆者は、筆者自身が直接訪問することができご家庭のみを調査対象、調査範囲とするという方針を、貫いている。このことは、筆者の調査目的からすれば、決してマイナスの経験ではなかったと考えている。

●注意すべき事項

どの国における調査においてもそうだと思われるが、信頼できる現地パートナーは知人・友人というだけでなく、調査者と現地を結ぶ水先案内人であり、非常に大切な存在である。

調査期間については、筆者自身はビザ取得手続の関係もあり、長期の調査よりもビザなしで滞在可能な二週間程度の短期の調査を積み重ねてきた(ワンショットサーベイと揶揄されることも多い)。この場合、最も注意しなくてはならないことは、体調の管理である。現地では一度病気になるてしまうと、その機会を得るために積み重ねてきた準備と努力が無駄になって

しまいかねない。長期間の調査では回復後に取り戻すことが可能かもしれない。しかし短期の調査では、それは容易でない。そのため、体調の管理には万全を期す必要がある。

また、調査対象者の方たちとお会いできる時間を一期一会と覚悟を決めて取り組む必要がある。一日に何軒も訪問していると、どうしても疲れが出る。同じコンディションを保ってお話をうかがうことは、必ずしも容易ではない。勇気を持って訪問家庭数を減らすことも選択肢とすべきだと思つた。

●おわりに

フィールドワークはけつして楽な仕事ではない。宿所に帰つても、書き込んだ調査票の見直し、メモの整理、日記の執筆、翌日の調査の準備と作業が続く。そのうえ、衣類の洗濯(調査地と宿所の条件により手洗いとなることも多い)、荷物の整理も加わって、夜遅くまで休めない。しかし、それ故に多くのことを自身に刻み付けることができる。筆者の実感から言えば、「土地の人の交流を通して素朴に学ぶこと」が、フィールドワークの核心として存在している。